

令和 3 年 6 月 4 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2020

課題番号：16K04293

研究課題名（和文）母子のトラウマ体験が子の感情制御の発達に及ぼす影響

研究課題名（英文）Influence of the Traumas Experienced by Mothers and Infants on the Development of Affect Regulation

研究代表者

大河原 美以 (OKAWARA, Mii)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：90293000

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：臨床仮説を実証することを目的とした5年間の研究プロジェクトにおいて5つの研究を行った。その結果、母の出産前の個人要因（複雑性トラウマ関連要因）が授乳時の愛着システム不全に影響を与え、それが幼児期の子どもの感情制御の発達に影響を及ぼすという臨床仮説が、縦断研究により実証された。本研究結果から、授乳時の愛着システム不全の支援が、子の感情制御の発達不全の予防のために重要であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

小学校では「年齢相応の感情制御が困難」な子どもたちの増加により、一斉授業での指導上の困難を抱えている。そのような子どもたちは「発達障害」という枠組みでの対応がなされているが、感情制御困難の問題は、親の複雑性トラウマに基づく子育て困難（愛着不全）に由来する。この観点をとり入れることのメリットは、親を支援する意味と可能性をひろげることである。本研究はこの臨床仮説を統計的に実証したものである。この実証データは、感情制御困難を抱える親子を救う視点の有効性を示すという社会的意義をもつものであるといえる。

研究成果の概要（英文）：This is five studies that have been undertaken over five years to substantiate certain clinical hypotheses. Here, the clinical hypothesis is that specific maternal characteristics acquired before childbirth influence the dysfunctional attachment system during breastfeeding, and it subsequently influences the young child's affect regulation. We present the results of a longitudinal study that we obtained using a questionnaire. This study shows that for the normal development of affect regulation it is essential to assist the dysfunctional attachment system during breastfeeding.

研究分野：臨床心理学

キーワード：感情制御 複雑性トラウマ 愛着 解離

1. 研究開始当初の背景

小学校では年齢相応に感情制御できない子どもの増加により、さまざまな課題をかかえている。感情制御の力が、乳幼児期における親子の健全な愛着の中で育つということは多くの先行研究が示しているところである (Schore, 2009; Teicher, et al., 2005)。そして臨床上は、母自身のトラウマ体験が乳幼児との愛着形成を困難にすることもよく知られている。研究計画時は、東日本大震災から4年が経過していた時期であった。そこで東日本大震災が母子に与える影響を視野にいて、母のトラウマ体験が乳幼児期の愛着と子どもの感情制御の発達に影響を与えるという臨床仮説を実証することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、母子のトラウマ体験が、乳児との愛着形成および子の感情制御の発達に及ぼす影響を、質問紙調査 (横断研究・縦断研究) により、明らかにすることである。

3. 研究の方法 (図1)

- (1) 東日本大震災における乳児期の親子のトラウマ体験について、21組の乳幼児の被災事例をまめ、3事例の支援の記録を考察する。
- (2) 東日本大震災における客観的被災状況と主観的被災状況を把握するために、東日本大震災被災評価質問紙を作成する。
- (3) 乳児期に関する調査 (横断研究) により、母の出産前の個人要因と震災要因 (客観的被災体験・主観的被災体験) が授乳時の愛着システム不全に与える影響を分析する。
- (4) 幼児期に関する調査 (横断研究) により、子育て要因と震災要因 (客観的被災体験・主観的被災体験) が子どもの感情制御の発達不全に与える影響を分析する。
- (5) 乳児期から幼児期までの縦断研究により、愛着システム不全が子の感情制御の発達不全にどのように影響するのかを分析する。

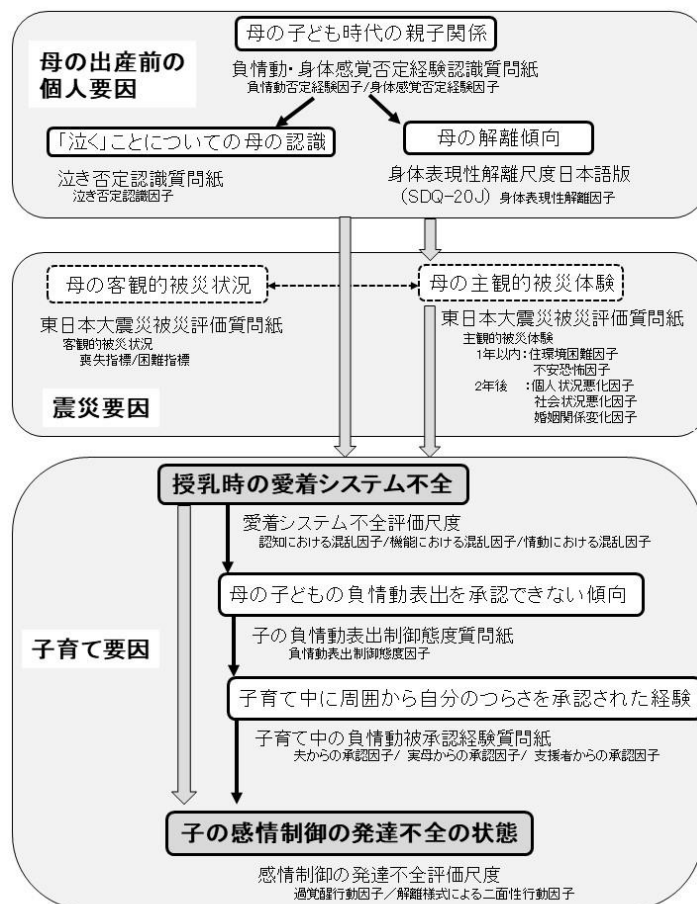


図1 調査の仮説と使用した質問紙及び因子構造

4. 研究成果

(1) 東日本大震災で被災した 21 組の乳幼児の親子のトラウマ体験と 3 事例の支援の記録に考察を加えた。相談に至る主訴は、子どもの PTSD 症状と発達の遅れ、母の不調の 3 種であった。子どもの PTSD 症状は、震災直後から過覚醒反応を示していた 5 事例と、震災直後には泣くこともなかったという解離反応を示していた 4 事例に 2 分された。母の不調を主訴とした 7 事例のうち 6 事例において、子の発達の遅れが顕著であった。子の発達の遅れがあった 11 事例のうち 6 事例が、震災後の妊娠により生まれた子であった。このうち 3 事例の支援の経過を詳細に記した。本研究から次のことが明らかになった。

乳幼児は、聴覚による不快な刺激によってトラウマになるということ。そして、親自身の喪失のトラウマにおける「喪の作業」の停滞は、乳幼児の発達の遅れおよび PTSD リスク要因からの回復の遅れに影響を与えることがわかった。親の「喪の作業」の停滞は、震災時に出生していない子どもにおいても同様の影響をもたらすことにつながることを示された。

(2) 東日本大震災被災評価質問紙を作成し、その信頼性と妥当性を検証した。質問項目は、被災地における臨床経験にもとづいて選択された。本質問紙は、喪失指標 11 項目と困難指標 47 項目からなる客観的被災状況質問紙（名義尺度）と、被災後 1 年以内の状況に関する 21 項目と 2 年後の状況に関する 41 項目からなる主観的被災体験質問紙（間隔尺度）で構成された。被災地の 449 名のデータで分析を行った。1 年以内の状況は「住環境困難」因子と「不安恐怖」因子の 2 因子に、2 年後の状況は「個人状況悪化」因子、「社会状況悪化」因子、「婚姻関係変化」因子の 3 因子構造となり、因子妥当性と信頼性が確認された。客観的被災状況と主観的被災体験は弱い相関を示すにとどまり、強い相関は示されなかった。

ここで作成した東日本大震災被災評価質問紙は、母子のトラウマ体験が「乳児期の愛着形成」および「幼児期の子の感情制御の発達」に及ぼす影響を明らかにするための 5 年間の調査研究のために使用される。

(3) 被災地における乳幼児をもつ 270 名の母への質問紙調査（乳児期調査：負情動・身体感覚否定経験認識質問紙・泣き否定認識質問紙・身体表現性解離尺度日本語版・東日本大震災被災評価質問紙・愛着システム不全評価尺度）を通して、臨床仮説を実証した。親から身体感覚を否定されてきたと認識している母は、「泣いてはいけない」という認識を抱え、我が子との授乳場面において認知・機能の点で混乱し、愛着システム不全が生じる。また、親から負情動を否定されてきたと認識している母は、身体解離を抱え、身体解離は授乳場面での認知・機能の点での混乱を引き起こし、愛着システム不全を生じさせる。また身体解離は「泣いてはいけない」という認識につながり、「泣いてはいけない」という認識は、授乳場面での認知・情動の点での混乱を引き起こし、愛着システム不全が生じることが明らかになった。

東日本大震災の客観的被災状況は、愛着システム不全には関係しないことが示された。震災後 1 年以内に主観的に強い不安恐怖や住環境の困難を体験するということは、2 年後の困難に通じ、それは授乳時における情動の混乱に関係していた。また、主観的な不安恐怖には「泣いてはいけない」という認識が関与していることが示された。

以上の結果から、愛着システム不全は、震災という単回性トラウマよりも、母の生育歴に由来する複雑性トラウマ（González, 2018）の影響下にあることが示された。

(4) 被災地における 342 名の幼児の母への質問紙調査（幼児期調査：子の負情動表出制御態度質問紙・子育て中の負情動被承認経験質問紙・感情制御の発達不全評価尺度・東日本大震災被災評価質問紙）を通して、2 つめの臨床仮説を実証した。その結果、母の「子どもの負情動表出を承認しない傾向」が、子どもの感情制御の発達不全に直接的に影響していることが明らかになった。

東日本大震災の客観的被災状況そのものは、感情制御の発達不全には関係していなかった。震災後 1 年以内に主観的に強い不安恐怖や住環境の困難を体験するということは、2 年後の困難に通じていた。特に、2 年後の社会状況悪化感、母の子どもの負情動表出を承認しない傾向を強めることで間接的に感情制御の発達不全に影響を与えていた。

(5) 縦断研究により、母の出産前の個人要因（複雑性トラウマ関連要因）が授乳時の愛着システム不全に影響を与え、それが幼児期の子どもの感情制御の発達に影響を及ぼすという臨床仮説を実証した（図 2）。

283 名の母への質問紙調査（負情動・身体感覚否定経験認識質問紙・泣き否定認識質問紙・身体表現性解離尺度日本語版・愛着システム不全評価尺度・子の負情動表出制御態度質問紙・子育て中の負情動被承認経験質問紙・感情制御の発達不全評価尺度）の分析の結果、以下のことがわかった。

①「自分は母親から負情動を否定されてきた」と認識している場合、そのことが直接的に、幼児期の子の過覚醒行動を高めていた。

②「自分は母親から負情動・身体感覚を否定されてきた」と認識している場合、泣き否定認識や身体解離を媒介して、授乳時に愛着システム不全を強め、幼児期に子の負情動表出制御態度が

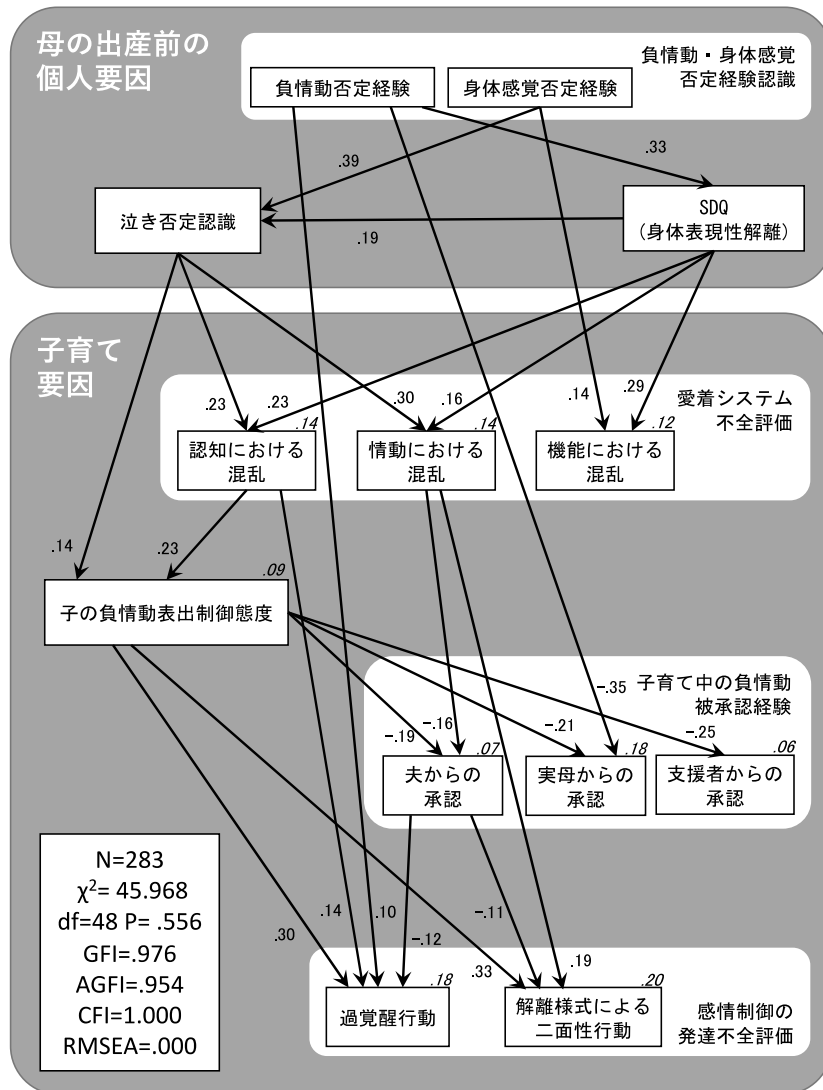


図2 授乳時の愛着システム不全が子の感情制御の発達に及ぼす影響

強まり、その結果、幼児期の子の過覚醒行動または解離様式による二面性行動が高められていた。
 ③しかしながら、夫から母自身の負情動を承認される経験をしている場合には、子の過覚醒症行動および解離様式による二面性行動は低下していた。
 本研究結果から、授乳時の愛着システム不全の支援が、子の感情制御の発達不全の予防のために重要であることが明らかになった。

本研究を通して、東日本大震災のような単回性のピクトラウマによる客観的被災そのものは、直接的に子育てに影響するわけではないことがわかった。むしろ、母自身がどのような環境で育てられてきたのかという母自身の愛着にまつわる体験（複雑性トラウマ）こそが、子育てに影響を及ぼすものであるということが統計的に実証された。

(引用文献)

González A. (2018) It's not me. Understanding Complex Trauma, Attachment and Dissociation. (2019) Amazon Fulfillment. アナベル・ゴンザレス/大河原美以監訳 (2020) 複雑性トラウマ・愛着・解離がわかる本, 日本評論社

Schore, A. N. (2009) Relational trauma and the developing right brain. An interface of psychoanalytic self-psychology and neuroscience. Self and Systems, Ann. N. Y. Acad. Sci. XXXX, 1-15

Teicher, M. H., Andersen, S. L., Polcari, A., Anderson, C. M., Navalta, C. P., & Kim, D.M. (2003) The neurobiological consequences of early stress and childhood maltreatment. Neuroscience and Biobehavioral reviews, 27(1-2), 33-44.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 大河原美以・鈴木廣子・林もも子	4. 巻 72
2. 論文標題 母子のトラウマ体験が子の感情制御の発達に及ぼす影響（4）－授乳時の愛着システム不全と幼児期の感情制御の発達不全との関係（縦断研究）－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 141-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大河原美以・鈴木廣子・林もも子	4. 巻 71
2. 論文標題 母子のトラウマ体験が子の感情制御の発達に及ぼす影響（3） - どのようにして感情制御の発達不全は生じるのか（横断研究） -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 89-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木廣子・大河原美以・豊島喜美子・林もも子・猪飼さやか	4. 巻 70
2. 論文標題 母子のトラウマ体験が子の感情制御の発達に及ぼす影響（2） - どのようにして愛着システム不全は生じるのか（横断研究） -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 117-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大河原美以・鈴木廣子・豊島喜美子・林もも子・猪飼さやか・響江史子	4. 巻 70
2. 論文標題 母子のトラウマ体験が子の感情制御の発達に及ぼす影響（1） - 東日本大震災被災評価質問紙の作成 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 103-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木廣子・大河原美以	4. 巻 69
2. 論文標題 乳幼児期の親子のトラウマ体験 - 東日本大震災の被災事例が教えてくれたこと -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 205-223
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Okawara, M. & Suzuki, H.
2. 発表標題 The Traumas of Parents and Infants: Lessons from Those Impacted by the Great East Japan Earthquake
3. 学会等名 16th WAIMH WORLD CONGRESS (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------